

日本ロシア文学会第57回研究発表会

報告要旨(予稿)集

(2007年10月27~28日, 千葉大学)

-
- A01 内田 健介 チェーホフの『かもめ』における家族像
A02 大山麻稀子 ガルシンに関する文学批評から見る“沈滞の時代”
A03 宮本 宗実 《インテグラル》をわれらのものに！—『われら』の二重構造を構成する“数学的な詩”
A04 大森 雅子 ミハイル・ブルガーコフと1920年代ソ連の反宗教プロパガンダ
A05 前田 しほ ナールビコフ『昼の星と夜の星, 光の均衡』における空間構成—自然/都市の融合と文学的記憶
A06 秋草俊一郎 ナボコフ「報せ」における二度の「翻訳」
A07 中野 幸男 A. シニャフスキーの創作における文学的役割としてのアブラム・テルツの創造
A08 覚張シルビア Л. トルストイの作品における文明・旅・時間
A09 山路明日太 レールモントフにおけるバイロン受容
A10 尾松 亮 1876年のドストエフスキーとクロネベルグ裁判論争
B11 河村 彩 モダニズム絵画を反復する写真—A. ロトチェンコの作品と「コンストラクション」の概念
B12 一柳富美子 音楽と言葉—芸術音楽における旋律とロシア語の統語論
B13 小松 佑子 チャイコフスキーの《エヴゲーニイ・オネーギン》
B14 本田 晃子 博物館の廃墟にて—ペーパー・アーキテクチャー運動における建築の記憶と記述の問題
B15 土居 伸彰 Yu. ノルシュテイン『話の話』について—S. エイゼンシュテイン晩年の芸術理論を手がかりに
B16 横田 智史 1980年代ソ連映画におけるドキュメンタリー性の「爆発的」な変容について
B17 宮崎 千穂 「稲佐お栄」の誕生
B18 有泉 和子 国境の認識Ⅱ—近世後期から幕末にかけて
B19 木部 敬 セルゲイ・トルベツコイの認識論的著作『人間意識の本性について』の言語論
B20 小俣 智史 フョードロフの終末論の構造と意義
B21 宇都 弥生 P. D. ユルケーヴィチにおけるプラトニズムと西欧近代哲学の相克
C22 村越 律子 《Ты》 или 《Вы》?
C23 恩田 義徳 古代教会スラブ語における分詞の短語尾・長語尾について

C- α パネルディスカッション：ロシア・フォルマリズム 文学理論を超えて—メディア, 経験科学, 一般意味論
(野中進, 八木君人, V. グレチコ, 貝澤哉)

C- β ワークショップ：ロシア語教育を考える—ロシア語学研究的立場から(中澤英彦, 臼山利信, 小林潔, 堤正典,
匹田剛, 山田久就, 金田一真澄, 林田理恵)

日本ロシア文学会

2007年9月

**Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 57th Annual Assembly
of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature
(Chiba University, 27-28 October, 2007)**

- A01** К. Утида. Образ семьи в «Чайке» А.Чехова
- A02** М. Ояма. «Эпоха безвременья» в литературных критиках о В.М.Гаршине
- A03** М. Миямото. «Интеграл» должен быть нашим: «математическая поэма» в романе Е.Замятина «Мь»
- A04** М. Омори. М.Булгаков и советская антирелигиозная пропаганда 1920-х годов
- A05** С. Маэда. Конструкция пространства в тексте «Равновесия света дневных и ночных звезд» В.Нарбиковой: слияние природы с городом и литературная реминисценция
- A06** S. Akikusa. A Twice Translated Story: Nabokov's "Breaking the News"
- A07** Ю. Накано. Создание А.Терца как литературного амплуа в творчестве А.Синявского
- A08** С. Какубари. Цивилизация, путешествие и время в творчестве Л.Толстого
- A09** А. Ямадзи. Восприятие Лермонтовым Байрона
- A10** Р. Омацу. Особенность позиции Ф.М.Достоевского в полемике по делу Кронеберга в 1876 году
- B11** A. Kawamura. Photographs Repeating Modernist Painting: On A.Rodchenko's Works and the Concept of "Construction"
- B12** F. Hitotsuyanagi. Music and Word: Syntax of Melody and Russian Language in Serious Music
- B13** Ю. Комацу. «Евгений Онегин» Чайковского
- B14** А. Хонда. В руинах музея: вопросы о памяти и записывании архитектуры в движении бумажной архитектуры
- B15** Н. Дои. О методе «Сказки сказок» Ю.Норштейна в сопоставлении с художественной теорией С.Эйзенштейна
- B16** С. Ёкота. Об эстетике документального «взрыва» в советском кино 80-х годов XX века
- B17** Т. Миядзаки. Рождение «Оей из Инасы»
- B18** К. Ариидзуми. Понимание государственных границ (II): в период от пленения В.М.Головниа до военно-дипломатической миссии Е.В.Путятина
- B19** Т. Кибе. Учение о слове в гносеологическом труде С.Н.Трубецкого «О природе человеческого сознания»
- B20** Т. Омата. Структура и значение эсхатологии Н.Ф.Федорова
- B21** Я. Уто. Синтез Платона с Кантом в философии П.Д.Юркевича
- C22** Р. Муракоси. «Ты» или «вы»?
- C23** Ё. Онда. О краткой и полной формах причастий старославянского языка
- C-α** Panel Discussion: Russian Formalism Transcending Literary Theory: Media, Empirical Sciences and General Semantics (S.Nonaka, N.Yagi, V.Grecko, H.Kaizawa)
- C-β** Workshop: Russian Language Education in the 21st Century: From the Viewpoint of Russian Linguistics (H.Nakazawa, T.Usuyama, K.Kobayashi, M.Tsutsumi, G.Hikita, H.Yamada, M.Kindaichi, R.Hayashida)
-

【A01】 チェーホフの『かもめ』における家族像
内田 健介

チェーホフの『かもめ』には、トレープレフとアルカージナの親子など、家族関係が描かれている。ヒロインであるニーナの父と母も舞台上には登場しないが、彼女に大きく影響を与えている。こうした家族という視点から、恋愛、芸術、成功、夢など多くのテーマが含まれた『かもめ』を読み解いていきたい。

『かもめ』では、トレープレフとニーナは片親を亡くしている。それゆえ、彼らにとって残された親は重要な存在であり、トレープレフは母親の才能の豊かさを語ると共に、愛人であるトリゴーリンに嫉妬に近い感情を抱いており、ニーナも舞台が終わると父親が待っているからとしきりに周囲に説明して帰っていく。また、彼らは亡き父や母に大きく影響されているという共通点を持つ。トレープレフは平民出身の父親から“卑しい”身分を受け継ぎ、ニーナは母親の遺言によって財産を剥奪されたのである。劇作家と女優という夢を持つ 2 人だが、互いに片親を亡くしたという境遇、そして亡き親から受け継いだ負の要素、こうした共通点によって互いに惹かれあつたと考えられる。

『かもめ』は、大女優を目指したニーナの旅立ちと、トレープレフの拳銃自殺によって幕が降ろされる。2 年の月日が流れ、夢を叶えた 2 人は作家と女優として再会するが、一方は死を、もう一方は耐え忍び生きることを選択する。この全く違う結果は、なぜ生じたのであろうか。この点は、トレープレフとアルカージナの母と子の関係に大きく起因していると考えられる。舞台上での 2 人を見ていくと、トレープレフの母親への愛情が異常なまでに強いことが分かる。それは花占いの相手がニーナでなく、アルカージナであることや、ニーナが演じている舞台を母親の飛ばした野次で中断してしまう部分に見られる。彼にとって母の存在は恋人の存在より大きいのである。しかし、アルカージナにとっての優先順位は、女優としての自分、女としての自分、母親としての自分の順番である。台詞を注意深く見ていくと、常にこの順番になっており、彼女の優先順位が示されている。そのため、親子の会話は噛み合わない。作家になりたいというトレープレフの夢は、純粋に自分のためではなく、母親との関係によって生まれている。それに対してニーナは、自分自身で女優という道を選択し、家族のもとを離れていく。家族から離れられなかったトレープレフは自殺し、家族から離れるニーナは夢を追い旅立っていく。この結末にはチェーホフの家族像が表出している。

(うちだ けんすけ, 千葉大学院生)

【A02】 ガルシンに関する文学批評から見る“沈滞の時代”

大山 麻稀子

皇帝アレクサンドル三世の専制護持の表明によって幕を開けた“沈滞の時代 Эпоха безвременья”は、ソ連時代にはマルクス主義的歴史観から挫折と退廃、転向と彷徨の時代と定義づけられてきた。これは革命運動を歴史の主軸とした見解であり、いわゆる「革命家」が当時のロシア人口全体の針の点にもならない少数者グループに過ぎなかったことを考えれば、あまりに一面的にすぎる定義であるといえよう。

19 世紀、厳しい言論統制が布かれていたロシア国内では、文芸批評は人々の注目と論議が集まる重大な社会現象にも比せられる場を占めていた。作家や批評家は若い世代の知的指導者であり、広汎な影響を与え、当時の知的階級の思想を動かしていた。

そのような社会情勢の中で、1880 年代に諸刊行物上でさまざまな批評家から「若手の世代で最も才能ある作家」と共通して認められ、その死に際しても「我々の時代の子、時代の代弁者」と一致して評されたのがガルシンである。1880 年代、これほど時代と密接なつながりをもって論じられた作家は他にいない。

1870 年代末から 1887 年までのガルシンを論じた同時代批評、そしてガルシンの死に捧げられた 1888-89 年の追悼論文を読み込むと、この時代には革命運動に対する“絶望”や“挫折感”といったもののみが問題にされていたわけではなく、もっと個人的な側面で問題提起がされていたことが分かる。それは、内なる自己(私的自己)と外なる自己(公的自己)との間の葛藤、矛盾感である。1880 年代当時、内なる自己と外なる自己との矛盾は内的不調和とみなされ、往々にして右派からも左派からも否定的に捉えられた。そこでは内なる自己との対話が「無気力、不信」と表現され、内部の良心の痛みが「絶望」と解釈された。この不調和を具現すると思われていた象徴的な人物こそが作家ガルシンだったのであり、インテリゲンチアは社会的存在としての己と、個的存在としての己の間にあるさまざまな葛藤、揺れ動きを、ガルシンを論ずることによって見つめていたように思われる。

当発表では、ガルシンに関する 1880 年代文芸批評の分析を通して、“沈滞の時代”の精神潮流の一端を開示することを試みる。

(おおやま まきこ, 千葉大学院生)

【A03】《インテグラル》をわれらのものに！—『われら』の二重構造を構成する“数学的な詩”—

宮本 宗実

《インテグラル》乗っ取りに失敗したIは、「(前略)上に出なさい！そこでみなさんの病気を治してくれるわ、(中略)うじ虫のように苦しげにかみ回る疑問符から、解放してやろうと言っているんですよ。(中略)大手術へ行きなさい。(中略)たとえ私が不可能なことをしたいとしても、あなた方にはどうでもよいことでしょう…(中略)古代人は、ろばという動物を持っていたというわ。ろばを前へ、前へと進めるために、その鼻面の前に、(中略)人参をつけたんだそうよ。(以下略)」(覚え書35。ザミヤーチン『われら』(川端訳)より引用、以下も同じ。)—これがあの魅力的な革命家Iの言葉と信じられるだろうか？

「すべての壁を壊し、(中略)《インテグラル》はこれらの壁をあの天高く運んで行こうとしているのです。」(覚え書27) — “単一国”がその理念を宣べ伝えようとしている“未知の生物”の住む他の惑星を、“革命家”Iは“壁”の膨大な残骸のゴミ捨て場にしようと言っている。しかし/しかも、“壁”を実際に爆破したのは乗っ取り失敗の後である。この革命計画は支離滅裂だ！

ここで、“苦しげにかみ回る疑問符”を「解くことに失敗した問題」，“人参”を“未知なるもの(解くべき問題)”，“ろば”を「数学者」と読みかえてみよう。これは問題を解くことに失敗したIが“未知なるもの”に対する数学者の業にさいなまれて周りに当たりちらしている場面の迫真の描写である。

「解くことに失敗した問題」とは何か？—“古代(20世紀)”に『数学の無矛盾性の証明』という未解決の大問題があった。この問題について：

「君はただ壁で無限(注：数学の矛盾)を囲ってしまいたいんだろうが、その壁の向こうをのぞいて見るのが怖いんだ。(中略)外をのぞいては見るが、眼をつぶってしまうだろう。」(覚え書8)—矛盾を囲む“すべての壁を壊し”(シンボリックに)大空に壮大にばらまき、“Интеграл”(= непротиворечивость математики) должен быть нашим。—これは、『数学の無矛盾性を証明しよう！』の意である。

“単一国の数学者”Дがこの企てに参加するためには“古代”の数学者に変容しなければならない。変容は対照的な二人の女性IとOの性の力を借りて行われ、死と再生の過程を「知性ではなく身体で信じ、感じる」(覚え書32)ことにより千年の時を遡行して完成する。

(みやもと むねみ、京都大学名誉教授)

【A04】ミハイル・ブルガーコフと1920年代ソ連の反宗教プロパガンダ

大森 雅子

1920年代のソ連において、反宗教プロパガンダの役割を担う新聞や雑誌が多数創刊、出版された。なかでも大衆向けの雑誌『無神論者 Безбожник』(1923-41)は、チェレムヌيوفやモールなど、「ロスタの窓」でマヤコフスキイと共に活躍した画家による風刺画が多用されており、大衆を無信仰へ導こうという意図が見て取れて興味深い。チェレムヌيوفと友人関係にあったブルガーコフはこの雑誌に関心を持ち、自らの日記の中で『無神論者』の冒険的な内容に衝撃を受けた様子を書き残している。先行研究においては、この雑誌によって受けた衝撃がブルガーコフの後の創作へのきっかけの1つとなったとしばしば言及されてきたが、具体的な検証はなされていない。

そこで本報告では、主に中編小説『犬の心』(1925)、戯曲『アダムとイヴ』(1931)、長編小説『巨匠とマルガリータ』(1928-40)を取り上げ、『無神論者』を始めとした反キリスト教プロパガンダの大衆雑誌の存在が、いかにブルガーコフ作品の形成に関わったかという点について論じる。

1920年代の雑誌『無神論者』では、デミヤン・ベードヌイなどの詩のほか、イニシャルのみの匿名の筆者による文章も多数掲載されていた。『犬の心』と『アダムとイヴ』では、『無神論者』における筆者の匿名性についてのブルガーコフの立場が仄めかされている。また、『無神論者』でしばしば取り上げられた科学万能主義の問題は、『犬の心』でも重要なテーマとなっている。

1920年代の『無神論者』の中のキリストは、階級闘争における敵、資本家と同列の偽善者、ペテン師として、また神話的な存在として、いずれも嫌悪すべき対象として描かれている。一方、『巨匠とマルガリータ』の初期の草稿では、反宗教プロパガンダとその雑誌について言及され、資本家とキリストが同時に描かれているシーンがある。

報告では、雑誌『無神論者』の風刺画を実際に提示しながら、ブルガーコフが自らの小説の素材として当時の反宗教プロパガンダをどう用いたのか、作品の創作過程にも目を配りながら明らかにしてみたい。

(おおもり まさこ、日本学術振興会特別研究員)

【A05】 ナールビコワ『昼の星と夜の星, 光の均衡』
における空間構成—自然/都市の融合と文学的記憶

前田 しほ

現代ロシアを代表するポストモダン作家ワレーリヤ・ナールビコワのテキストは、伝統的なロシア文学の豊かなレミニッセンスにあふれ、文学作品や文学関係者のエピソードが頻繁にパロディ化される。

他方、プロットは非常にシンプルで、親密な私的空間における女性主人公の恋愛の顛末が中心である。

また作品の舞台となる場所や時期は直接記されず、1980-90 年代のモスクワないしソ連国内と推察されるような最小限の情報に限られる。そのため、メイン・プロットは開かれたあいまいな空間になり、これによって間テクスト的空間と「意識の流れ」的にたやすく交差する独特な空間が形成されている。そこでは、地理的空間が突然移動したり、過去の歴史的人物が登場したりして、写実的な手法においてはあり得ないような、「不条理」な空間が形成される。

デビュー作『昼の星と夜の星, 光の均衡』(1988)では、まずモスクワからペテルブルグへ車で移動し、そこで洪水が起きると、突然舞台はモスクワ近郊の野外博物館ツァリーツィノに移動する。ペテルブルグでは、生活空間である都市の景観に、沼地や森のビジョンが重ねられ、ペテルブルグ文学の伝統を連想させつつ、ポストモダンの言語遊戯によって、独自の空間が構成されている。洪水を契機に、これが建設途中で放棄され自然と調和した不思議な空間として人々に愛されるツァリーツィノに移動する。しかし、距離的に離れた空間であるツァリーツィノへの移動は、いかにも唐突であるし、これらの地名は直接には名指しされない。当時、まだソ連時代には、両者はそれぞれレーングラード、レーニノの旧名で呼ばれており、「レーニンの町」から「レーニン村」への移動は、都市から農村へという、近代化に逆行した動きではあるが、生活空間の自然化という意味では、一貫したイメージに従っている。そもそもナールビコワが、言語の意味と記号をめぐるゲームを好んだ作家であることを思い出せば、ペテルブルグもツァリーツィノも、現実から切り離された観念的なイメージと位置づけられる。

本報告では、以上のように、名指しをせずに、名前の連想を巧みに操作するナールビコワの手法を、空間の構成という点に注目して考察する。

(まえだ しほ, 室蘭工業大学)

【A06】 ナボコフ「報せ」における二度の「翻訳」

秋草 俊一郎

ウラジーミル・ナボコフ(1899-1977)が1934年に発表した「報せ Оповещение」は、1973年に“Breaking the News”としてナボコフ自身によって英訳された短編である。ベルリンで暮らす貧しい亡命者エヴゲーニヤ・イサコヴナは、パリに出稼ぎに出ている息子ミーシャからの送金と手紙を日々の糧にして暮らしている。この短編が始まった時点で、ミーシャはエレベーターのシャフトに転落して事故死しているのだが、まだエヴゲーニヤ・イサコヴナは痛ましい事実を周囲から知らされていない。タイトルが暗示しているように、その不幸な報せが彼女にいかにか知らされるのかがこの短編での最大の焦点になっている。

本発表では、この短編のロシア語版と英語版を比較し、自作翻訳のメカニズムを検証しつつ作品のコンテクストについて考察する。この作品はナボコフの全短編の中でもっとも短い部類に入るものにもかかわらず、興味ぶかい変更が散見できるからだ。ナボコフがいかにかに翻訳したかが理解できれば、作品の内容についての洞察も同時に得ることができる。本発表では特に、背景となる歴史的、伝記的なコンテクストに照らしてみた際に、作品がどのように意味を変化させるのかを観察したい。さらに、英語時代の作品「暗号と象徴 Signs and Symbols」(1948)と対照することで、本作を一種の「モデルケース」としてナボコフの創作におけるコンテクストの影響やその意識の変化について立体的に考察したい。

ナボコフの作品のロシア語版と英語版を引き比べ、つぶさに観察すると、「完全に忠実に訳した」というナボコフ自身の説明では納得できない変更がしばしば遭遇する。これは文化的なずれと比べても言えることだが、原作と翻訳の時間的ずれから生まれる歴史的、伝記的なコンテクストの変化が及ぼす作品への影響にナボコフ研究者は今まで少なからず無自覚だった。ナボコフの作品の多くがかなりの時間—30年から40年—がたってから翻訳されていることを考えれば、歴史的、伝記的なコンテクストの変化という問題は、ナボコフの作家としての変化という問題と同レベルで重視されるべきだろう。本発表では、それぞれの失われたコンテクストを再構築し、それぞれのヴァージョンに応じた緻密な読み直しを試みる。

(あきくさ しゅんいちろう, 東京大学院生)

【A07】 A. シニャフスキーの創作における文学的役割としてのアブラム・テルツの創造

中野 幸男

1966年のシニャフスキー＝ダニエル裁判後40年を経過し、スタンフォード大学フーバー研究所のアンドレイ・シニャフスキー・コレクションの公開、未亡人マリア・ローザノワの回想録『127通の愛についての手紙』の刊行などにより、シニャフスキーのみならず、過去としての「第三の波」亡命文学者たちの研究を取り巻く環境は一変した。

本稿では、上記アーカイブ資料およびパリでの作家の親類・知人などへのインタビューをもとにシニャフスキーの従来知られていない伝記的事実を再構成し、その伝記を意図的に借用した創作における「アブラム・テルツ」の文学的役割を考察する。

アブラム・テルツの成立過程において、ソヴィエト体制に対する幻滅より出発した作家アブラム・テルツは、その文学的マニフェストである『社会主義リアリズムとは何か』で述べられているように、袋小路に至ったソヴィエトの美学的課題を解消するシニャフスキーの文学的実践として現れている。アブラム・テルツの響きの持つ「ユダヤ性」及びその含意はシニャフスキーの様々な発言に述べられているように、当時の社会的背景により裏付けることができる。1989年のエヴゲーニー・エフトゥシェンコの回想により明らかになった米ソ間でのアブラム・テルツの逮捕に関わるやり取りは、ソヴィエト体制に抵抗する作家個人との関係のみならず作家を取り巻いていた複雑な政治的緊張を証言している。

ロシア文学の伝統において「文学的役割」としてのアブラム・テルツを考察するならば、ロトマンが述べているように、ピョートル改革以後のロシア貴族においてヨーロッパ文化に対する自己規定として「文学的役割」というものが見出され、貴族たちは歴史上の人物、政治における要人、文学作品の登場人物などから自己規定の不変の対象を選びだし、それに自身を重ね合わせることで日常生活を変化させていた。またリディア・ギンズブルグは、教養あるロシア貴族以外にも、若いロマン主義者、1860年代の雑階級知識人などに「歴史的な性格」を見出し、彼らが自己規定としてローマの勇士、バイロン、シラー的モデル、ニヒリストなどに対象を見出していたことをあげている。アブラム・テルツをこのような自己規定と対象選択におけるロシア文学の伝統の延長線上におきながら、シニャフスキーの選択における独自性・背景を探る。

(なかの ゆきお, 東京大学院生)

【A08】 J. トルストイの作品における文明・旅・時間

覚張 シルビア

J.トルストイは、ルソーの思想を継承したと考えられているが、それは特にトルストイの自然観に顕著である。ルソーにおいては、社会状態が自然状態に対立するものとして描かれるが、トルストイにおいて自然と対立するのは、文明だということができよう。

『アンナ・カレーニナ』には、この自然と文明の関係が如実に描き出されている。特に、文明の象徴ともいえる鉄道は、主人公のアンナとウロンスキーが会おう舞台となり、アンナを死に至らしめるという点で、小説の根幹を成すと言ってよい。また、アンナの夢に現れて鉄を鍛える百姓の姿を、草刈りに従事するレーヴィンと連想させることで、鉄道の形象を、アンナとレーヴィンの二人の物語を結び付ける基盤とする視点もある。作者に極めて近い人物であるレーヴィンと、基本的に否定的な人物として描かれるカレーニンの鉄道に対する態度も、軽視できない重要性を孕んでいる。

アンナは、列車の中で、時間的・空間的感覚、さらには個人としての感覚をも失うが、同様の感覚の描写は、トルストイの他の作品にも見受けられる。すなわち、『イワン・イリイチの死』の主人公が黒い袋の中でもがく姿、『戦争と平和』でピエールが夢に見る、生と死を繰り返す地球儀上の水滴の動きを想起させる。鉄道は、生死と極めて密接な感覚を喚起するのであり、それは、アンナと死との距離をも決定づける。

アンナの死に先行する精神状態と行動の関係を見ると、情報伝達と交通手段の発達によって、彼女の不安が増大することが分かる。アンナにとって時間は等質ではなく、彼女は時間を操作することで時間のうちに居場所を見つけようとするが、むしろ時間に操られるばかりである。

『復活』においては、シベリアに向かう際の交通手段が、マースロフとネフリュードフの精神的復活の程度に影響を与えている。

鉄道に限らず、旅もまた、人間に大きな影響を与え得る。アンナにとって移動とは、自身の精神状態からの逃亡でもある。このように、文明の象徴としての鉄道、文明と連動して変質する時間、移動が登場人物に作用するプロセスを分析する。

(かくばり しるびあ, 東京大学院生)

【A09】 レールモントフにおけるバイロン受容

山路 明日太

本発表では、レールモントフが英国詩人バイロンをどのように受け入れ、その形象を自らの創作活動の中でどのように表現していったかについて述べる。

だがその焦点は、作家のバイロン受容について概括的に述べるのではなく、彼が創作活動の初期に心酔したバイロンに対し、その後期には批判的な距離を保ちつつ、代表作『現代の英雄』の主人公の人物形象の描出においてどのように昇華したかということにある。

レールモントフはゲーテ、シラー、プーシキンをはじめ数多くの国内外の作家から影響を受けているが、その創作活動初期のバイロンへの熱狂は特別である。この英国詩人への心酔は、レールモントフ自身の数少ない手記や知人の回想記、そして「バイロンの域に達することができればいいのに」と歌う詩からもうかがえる。さらに 1830 年から 36 年までバイロンの抒情詩・物語詩を、半ば英語を学ぶために行なった散文での翻訳から、自らの心情をも吐露するように自由に訳した韻文体のものまで、いくつも手がけている。こうした心酔ぶりは「レールモントフは好んでバイロンになったのではない。生まれながらにバイロンのだったのである」(スローニム)という言葉裏付けるもののようにも一見感じられる。

だが、同時にこの時期「いいや、ぼくはバイロンではない、ぼくは別のものだ」と自らの立場を宣言しているように、英国詩人との離反を図ろうとする姿勢も見られる。この詩にはバイロンへのこだわりと反発の両方が反映されているが、そうした創作態度は『現代の英雄』のペチョーリンの人物造形においても目にすることができる。

本発表では、こうした初期レールモントフのバイロンへの熱狂ぶりと違いの自覚を踏まえたうえで、『現代の英雄』においてそれらがどのように創作技法として反映されているかを論じる。その際、『バイロンの手紙と日記』と照らし合わせながら「ペチョーリンの手記」にみられるバイロンの要素を検討する。その上で、レールモントフがバイロン自身とかつてそのバイロンに熱狂した過去の自分をテキスト内に含みこむことによって、主人公にどのような性格が付加されたかについて考察する。

(やまじ あすた, 室蘭工業大学)

【A10】 1876 年のドストエフスキーとクロネベルグ裁判論争

尾松 亮

1876 年の『作家の日記』におけるクロネベルグ児童虐待裁判論は、ドストエフスキー研究において重要なテーマとして扱われてきた。特にこの「クロネベルグ裁判論」を『カラマーゾフの兄弟』の創作プロセスに位置づける主張は根強い。『カラマーゾフの兄弟』が「子供について」の小説として構想されていたこと、また並行してドストエフスキー版「父と子」の構想があったことを指摘し、ドリーニンやベルナップ等の研究者は「クロネベルグ裁判」論を『カラマーゾフの兄弟』の原材料の一つと位置づけている。しかしこのような創作史研究は、『カラマーゾフの兄弟』(特にイワンカラマーゾフの「子供論」)先にある跡付けという印象を免れない。

「クロネベルグ裁判」とその無罪判決は、1876 年当時のロシア言論界に激しい議論を巻き起こし、ドストエフスキー以外にもサルティコフ・シチェドリンをはじめとする有名無名の知識人たちが論争に参加した。

本報告では弁護士スパソヴィチの演説原稿、新聞における報道(Судебная хроника)や当時の教育雑誌における論評等の資料を基に、クロネベルグ裁判論争の経緯を追ってみたい。

今回はあえて『カラマーゾフの兄弟』の前史としての視点を捨て、「クロネベルグ」論争の経緯、そして論争におけるドストエフスキーの立場の独自性を問うことにしたい。ドストエフスキーは決して、『カラマーゾフの兄弟』(子供についての小説)のために意識的に「クロネベルグ」事件取材したわけではない。むしろ移行期における「子供の運命」を描いた前作『未成年』の問題意識を引きずったまま、この事件に出会い、やむにやまれず論争に参加したのではないだろうか。その意味でこの事件は 1876 年のドストエフスキーにとって、まさにタイムリーだったといえる。クロネベルグ裁判の直前に単行本の刊行が終わった『未成年』とのつながりを考慮して、ドストエフスキーの創作活動における「クロネベルグ裁判」論の再評価を試みたい。

(おまつ りょう, NIPROS)

【B11】モダニズム絵画を反復する写真—A.ロトチェンコの作品と「コンストラクション」の概念をめぐって—
河村 彩

アレクサンドル・ロトチェンコ(1891-1956)は、マレーヴィチ、タトリンとならぶ20世紀初頭のロシアを代表する芸術家である。とりわけ書籍の装丁や広告用ポスター、家具のデザイン等によって、ロトチェンコはロシア構成主義のデザイナーとして知られている。しかし、本発表で焦点をあてるのは、構成主義デザイナーとしてのロトチェンコではなく、画家・絵画理論家としてのロトチェンコである。この発表で考察の対象とする作品は、1918～21年までの絵画と、1924～29年までの初期の写真であり、作品を検討しながらロトチェンコの絵画と写真に通底する原理を明らかにする。

ロトチェンコは1910年代に抽象画の制作を行っていたが、1921年を境に芸術の有用性を主張して突如絵画の制作を放棄し、デザインに力を注ぐようになる。このロトチェンコの創作の転換の契機となったのが、インフク(芸術文化研究所)の客観分析グループによる「コンストラクション」の概念をめぐる議論であった。だが絵画を放棄するというロトチェンコの身振りとはうらはらに、1924年以降に写真という二次元平面のジャンルに彼が取り組むとき、そこにはふたたび絵画の原理が現われる。

ここでは、ロトチェンコの写真の構図を出発点とし、絵画作品と理論を分析することによって彼の写真に隠されたモダニズム絵画の原理を明らかにする。一般に構成主義は、機能的なデザインを打ち出し、それ自体に価値を見出す美学を否定して有用性を主張したことで知られている。しかし本発表で試みることは、ロトチェンコの写真作品と理論をとおして、構成主義の語源ともなった「コンストラクション」の概念の起源のひとつが、有用性とは矛盾する純粋なモダニズムの絵画美学にあったことを明らかにすることである。

(かわむら あや, 東京大学院生)

【B12】音楽と言葉—芸術音楽における旋律とロシア語の統語論—

一柳 富美子

19世紀後半以降、オペラや歌曲・合唱曲といったロシア語を伴う芸術音楽に於いては、ロシア語の抑揚が音楽の旋律やリズムを規定する要素の一部となり、百年近くに及んだイタリア音楽の影響下から脱した。

本発表では、こうしたロシア音楽の歴史的変遷を譜例とともに辿りながら、近現代の音楽作品の統語論を総括すると共に、近代以降の作曲家達が19世紀前半以前の「旧様式」とそれ以降の「新様式」をどのように使い分けているのかを、具体的に指摘する。

ロシア語を伴う旋律研究の資料は、正教会内で使用されていたネウマ譜によるズナーメニ聖歌に遡る。このズナーメニ聖歌の段階で、既に旋律と単語との有機的な対応が認められる。しかし17世紀後半に誕生した三声体のカントではこの対応が後退、さらにイタリア音楽の影響がそれに拍車を掛け、旋律優先の時代となる。しかし、カントから発展した19世紀初頭のロマンスは両者の関係に新たな道を開き、徐々に旋律と単語とが密接な相関関係を築いていく。そして国民楽派の作曲家たち、特にダルゴムイーシスキとムソルグススキによって、音楽作品の統語論は完成し、以降、プロコフィエフやショスタコーヴィチに至るまで、その大原則は変わらない。なお、芸術音楽に於ける民謡の影響は、論者の研究した範囲ではあくまで旋律のみであったので、本論では言及しない。

取り上げる作品は、ネウマ譜による聖歌、ピョートル大帝讃歌のカント、アリャービエフ及びグリーンカのロマンス、ムソルグススキのロマンスと《ボリス・ゴドゥノフ》、チャイコフスキのロマンスと《エヴゲーニイ・オネーギン》、ラフマーニノフのロマンス、プロコフィエフ《みにくいアヒルの子》《アレクサンデル・ネーフスキ》、ショスタコーヴィチ第13交響曲の予定である。

ロシア音楽作品の統語論は、作曲家の様式論にもかかわる重要なテーマであるが、これまで殆ど顧みられず、「ロシア語の抑揚を重視した」などと根拠もなく安易に言及されることが多かった。本研究が、ロシア音楽作品研究に於けるそうした現状に一石を投じるものとなれば幸いである。

(ひとつやなぎ ふみこ)

【B13】チャイコフスキーの《エヴゲーニイ・オネーギン》

小松 佑子

チャイコフスキーはプーシキンの韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』に基づき、原作の発表から約 50 年後の 1877-78 年に、同名のオペラを作曲している。その関心の中心は、主人公であるオネーギンよりむしろタチヤーナに向けられていた。作曲家は生涯を通じて政治的、社会的問題に直接関与はしなかったが、常に社会の状況をオペラに反映させ、オペラが現実とかけ離れたものではないことを強調し、聴衆がオペラによってロシアの社会の現実を理解するよう試みていた。それ故、原作の発表からの 50 年間の歴史、ロシア文学に現れたヒロイン達、現実社会における女性の生き方の変化、女性の代表としての形象が、タチヤーナの中に凝縮されていることは明らかである。

オペラの脚本制作には友人の助けを多少借りたが、大部分は作曲家自身が行った。脚本については、初演前からの作家ツルゲーネフの批判が発端となり、初演時のフィナーレで行った原作の大々的な変更は、当時のプーシキン信奉者から“聖物冒瀆”として非難を受けた。この問題は作曲家擁護派と反対派の間に騒がしい論争を生み、最終的にはオペラの結末を原作に近い形に戻さねばならなかった。しかし、オペラの核である〈タチヤーナからオネーギンへの手紙〉の場面は、原作に殆んど忠実で、批判の対象となったのは僅か数行の追加部分である。これは作曲家がこの場面を原作よりも更に力強く描写し、聴衆の納得する形象の存在を音により明確に表現しようとした結果である。

チャイコフスキーは、初めてのプーシキン作品のオペラ化の試みにおいて、作品を深く読み込み、そこから得る靈感によって音楽的に忠実な表現を行ったと思われる。また作曲家はプーシキンの作品に触れることによって、もち前の天分と精神世界の抒情的で演劇的な領域をそれまで以上に開花させることが出来たと言える。更にオペラに形を変えた文学作品は独立した生命を授けられ、現在も生き続けている。このオペラは、作曲家自身が述べているように、演劇的な大きな効果を狙ったものではなく、内的な特別の画策も見られない。全ては主人公達、特にタチヤーナの精神生活の音楽描写に集中されている。

本発表では、オペラの中でタチヤーナの形象が如何なる成長を遂げたかにつき、〈手紙〉の場面を中心に説明を試みる。

(こまつ ゆうこ、東京大学院生)

【B14】博物館の廃墟にて—ペーパー・アーキテクチャー運動における建築の記憶と記述の問題—

本田 晃子

ソヴィエト・ロシア建築史の第一人者である S.ハンマゴメドフは、20 世紀のソヴィエト・ロシア建築において、世界の建築史上意義を有する現象とは、アヴァンギャルド、スターリン様式、そして 1980 年代に展開されたペーパー・アーキテクチャー運動であると述べている。興味深いのは、これらのそれぞれの時期に制作された建築プランのほとんどが紙上の建築、いわゆるペーパー・アーキテクチャーだということである。

しかし、前二者が建てられることを目指しながら逆説的に建築不可能性へ至ったのに対して、ペーパー・アーキテクチャー運動においては、建築家たちによってあえて建てない建築が選択された。その代わりに、彼らは建築雑誌と展覧会という 20 世紀的な建築メディアを地盤とし、自らの作品を西側諸国で流通させることに成功した。ここでは同運動で主導的な役割を果たした二人組の紙上建築家、A.ブロッツキーと I.ウトキンの、建築博物館というテーマに沿って描かれた二枚の作品を中心に扱い、そこから紙上建築博物館という形式を通して建築を表象することの意義を論じていく。

1. 建築博物館というイロニー

『納骨堂—建築』(1984)、『納骨堂—住居』(1986)という二作品について、D.クリンプの博物館論を参考に、博物館の展示における知の制度自体の失効と、これらの建築博物館の関係について論じる。その際には、M.エプシュテインのリリックな博物館や I.カバコフの共同住宅=博物館も参照し、これらの建築博物館における記憶・保管の試みが、忘却・喪失とパラレルな関係にあることを明らかにする。

2. 街路と室内のトポロジー

これらの博物館における「観者=都市住人」という観点から、住まいにおける私的空間と博物館の公的な展示空間、そして街路(ファサード)の関係を論じ、内部と外部、私的空間と公的空間のねじれについて考察する。さらにこのようなねじれを、紙上建築という形式において表現することの意味についても考えたい。おわりに

上記の作品の時間的・空間的な倒錯を総括する。それを通して、「場所を欠いていること безместность」と「時間の外部にあること вневременность」という彼らの作品の性質を明らかにし、現代の都市・建築空間に対して、これらの紙上建築博物館がどのような批評的射程を有するかを明らかにする。

(ほんだ あきこ、東京大学院生)

【B15】Yu. ノルシュテイン『話の話』について—S.
エイゼンシュテイン晩年の芸術理論を手がかりに

土居 伸彰

画家志望の青年だったユーリー・ノルシュテインは、国営のアニメーション・スタジオであるソズムリトフィルムに勤務していたときセルゲイ・エイゼンシュテインの6巻本選集(С.Эйзенштейн, Избранные произведения в шести томах, Москва: Искусство, 1964-1971)を読み、アニメーション制作に専念することを決めた。この伝記的事実については本人の口から何度も語られているのだが、作品自体への影響という点については、これまであまり考察されることがなかったように思われる。

本発表では、ノルシュテイン『話の話』(1979)に見られる、エイゼンシュテインの芸術理論の影響を明らかにしようと試みる。

例えば、『話の話』で「永遠」と名付けられたエピソードと、エイゼンシュテインの論文「無関心ではない自然」(1946-48)の終盤で語られるメキシコでの体験は、眼前に広がる景色に圧倒された実体験を描写しているという点において一致している。共に、見慣れたはずの景色が新たに蘇っていくような感覚について語るものであり、両作品・論文において重要なモチーフとなっている。

この例をはじめとする両者の共通点については、エイゼンシュテインがメキシコ訪問後に強調するようになる「感覚的思考」という退行的側面の重要性についての議論や、チャーリー・チャップリン論である「チャーリー・ザ・キッド」(1939-43)などを参照することによって、さらに詳しく検証できると考えられる。

そこで本発表では、エイゼンシュテインの晩年の芸術理論を補助線として、具体的なシーンを参照しながら『話の話』の分析を行い、ノルシュテインがエイゼンシュテインの芸術理論の良き理解者であり、エイゼンシュテインが提示する創作の図式を『話の話』において丹念になぞっているということを明らかにする。そればかりか、この検証作業により、メキシコ訪問以降のエイゼンシュテインの芸術理論を再考する上でも新たな端緒を開くことができるだろう。

(どい のぶあき, 東京大学院生)

【B16】1980年代ソ連映画におけるドキュメンタリー性の「爆発的」な変容について

横田 智史

1980年代のソ連は、社会・政治状況の変動にとどまらず、そのような環境下において制作されたドキュメンタリー映画においても、その「ドキュメンタリー性」の質が決定的な変化を被った時代であった。

本発表では、この変容についての検討を通じて、映像媒体に定着された記録に対して、それを受容する社会の側からなされる歴史性や神話性などの意義付けがいかになされ、またその有効性を失っていくかという過程を辿ってみたい。そのような変遷とは、つまるところ、革命以後に構築されたドキュメンタリー映画制作に関する理論とそれに付随してなされた実践が80年代の社会・政治状況の変化のうちにその成立根拠を脅かされていく過程であると、端的に要約することもできる。それ故80年代における「ドキュメンタリー性」の質の決定的な変化について考察することは、20年代以降ジガ・ヴェルトフらによって構築されていったドキュメンタリー映画にまつわる理論や実践に対して再検討をおこなうことにもなる。

本発表での考察の主たる参考文献であるリリアナ・マリコヴァの『歴史としての同時代 Современность как история: реализация мифа в документальном кино』(2002)もまた、そのような20-30年代と80年代を対比させるアプローチを取っていて、副題にあるようにソ連期のドキュメンタリー映画に付与され続けてきた神話性とその神話性の成り立ちに深く関わっている20-30年代のドキュメンタリー映画にまつわる理論と実践についての考察に著作の前半部は割かれている。そして、後半部で80年代にその神話性が被った変化について考察がなされるという構成になっている。

本発表では、マリコヴァの議論に沿って80年代の社会・文化的情勢の変化とドキュメンタリー映画のあり方の変化の関係を確認しつつ、マリコヴァの論考では主たる考察対象にはなっていない80年代ソ連の映像文化の変化のもう一つの主要因であったテレビ・ビデオ文化にもいくらか触れることでマリコヴァの論を相対化し、80年代ソ連の映像文化の大きな変容に関して「ドキュメンタリー性」という観点から一定の見取り図を提示できればと考えている。

(よこた さとし, 一橋大学院生)

【B17】「稲佐お栄」の誕生

宮崎 千穂

道永栄(1860-1927)は、「稲佐お栄」と呼ばれ、ロシア軍人相手に成功した女性として有名である。幕末より日露戦争に至るまで、長崎の対岸一帯「稲佐」は、「おろしあ租界」、「ロシア村」と称され、ロシア艦隊の上陸地として栄えた。稲佐では、ロシア艦隊相手にさまざまな商売が繁盛し、出稼ぎのために人の流れは稲佐へと向かった。そのなかには、ロシア士官相手の「ラシャメン(洋妾)」や下級水兵相手の女郎となる女性たちが特に多く含まれている。道永栄もまた、熊本県天草郡に生まれ稲佐に出た女性のひとりである。そして、貧しい境遇から一転してロシア人相手の「ホテル」経営者として稲佐で成功をおさめた。

現在、道永栄の活動は、「国際交流」、「暖かい交流」などとして、また、稲佐もその舞台として紹介されることが多い。しかしながら、「国際交流」といわれ始めたのはそれほど前のことではない。本報告では、生存当時から現在に至るまで、道永栄がどのように語られてきたのか考察する。

道永栄が語られ始めるのは、大正時代以降のことであろう。「稲佐お栄」は、稲佐の「おろしあ租界」をどのようにとらえるかというなかで誕生したのである。

大正時代には、晩年の道永栄本人なる人への新聞記者によるインタビューも交えられた回顧的な記事の存在が確かめられ、日本女性としての「自覚」が「本人」の口から語られる。そして、昭和 10 年代、道永栄は「露探」と中傷されながらもロシア艦隊の動向を日本側にいち早く知らせた「忠君」の女性として描かれていく。『或日のお栄さん』(昭和 13 年)という放送用の物語も出現した。昭和 18(1943)年の新聞記事によると、当時、日露戦争の功労者としての「稲佐お栄」が脚光を浴びていたという。そして、昭和 40 年代、明治百年を目前に明治の歴史の一つとしてとりあげられた「稲佐お栄」は、稲佐の「女王」といわれながら「ラシャメン」として蔑まれもした。そして現在、「稲佐お栄」は、名誉復権が叫ばれ、「ホテル」の経営者、起業家といった「国際交流」の立役者として描かれている。

「稲佐お栄」とは、一人の実在人物を介した稲佐の歴史に対する認識である。そして、私たちはそれを「国際交流」という言葉だけでとらえてよいのか、今一度考える必要があるだろう。

(みやざき ちほ, 名城大学)

【B18】国境の認識Ⅱ

—近世後期から幕末にかけて—

有泉 和子

昨年、京都大学における学会で、「国境の認識—「北方領土問題」の始まり」として、日露両国の「北方」に対する考え方の違いに付き、現行日本政府の主張の基である最初期部分、すなわち日本の年代で言えば、正保元年(1644)幕府作成による絵図である正保國絵圖に始まり、寛政十二年(1800)高田屋嘉兵衛のエトロフ航路開設、文化元年(1804)レザノフ来航、文化三～四年(1806-07)フヴォストフ・ダヴィドフ事件、文化八～十年(1811-13)ゴロヴニン事件にかけて、報告した。

今回はその続編パートⅡである。

年代としては、ゴロヴニン事件解決時から、プチャーチン軍事外交使節の来日、すなわち、1810 年代から 1860 年代あたりまでとし、安政元年(1855)伊豆下田における日魯通好条約締結で両国国境が択捉と得撫の間に引かれたことに焦点をあわせ、さらに、明治八年(1875)樺太千島交換条約で樺太を放棄する代償としてロシアから千島列島を譲られたことにも言及することになる。

日本側、少なくとも幕府の公式見解では、下田条約以前の幕府には、明確な国境認識がなかったことは前回述べたが、同様の状態が、今回報告の時期にも垣間見られる一方、ロシア側は、ゴロヴニンが捉えられたことが直接の契機であったと考えられるとはいえ、かなりの程度まで、国境を意識しており、画定の必要性を感じていたこと、にもかかわらず、あくまで、「日本の出方次第」との態度を崩さなかったこと、圧力をかける一方で、日本の認識の甘さを利用し、改めて提起することなく、なし崩しの事実主義を採ろうとしていたこと、しかしながら、最悪の場合は武力を使うことも視野においていたこと等を年代順に見ていく。

言及は、百家争鳴や海軍士官のレベル部分ではなく、両国政府の公式の見解、及び、それに近い部分、すなわち、政治外交の表舞台に完全に表れた部分に絞る。

現在の政治外交問題に直結する微妙な部分であるため、政治的発言、及び、報告者自身の政治見解は一切避けるとともに、本報告をそのような形で利用することのなきよう、あらかじめお願い申し上げます。報告者の立場は、政治および政治学にはなく、あくまでも、歴史学にある。

使用する史料は、日露両国の一次史料が中心となる。

(ありいずみ かずこ, 東京大学史料編纂所)

【B19】セルゲイ・トルベツコイの認識論的著作『人間意識の本性について』の言語論

木部 敬

認識論とは何であるかを決定することは難しいが、もしこれを〈いかなる対象であれ、それがどのようにして認識されたかが示されないうちは、その実在を承認せず、このことによって対象の独断的な措定を退ける議論〉と解するならば、その時には、ロシアの哲学的思索には認識論への志向が希薄であると言わざるをえない。19世紀になってもなお、ロシアの思想家たちは絶対や原理をあまりにも安易に定立しているように見える。

セルゲイ・トルベツコイは『人間意識の本性について』(1889-91)において、意識を「個的なもの *личность*」と捉える近代西欧哲学に抗しつつ、意識とはいかなる意味においても個的ではないもの、「ソボルノスチ *соборность*」であるとする。周知のように、これは古典的スラヴ派によって唱導された概念だが、トルベツコイにおいては(V.S.ソロヴィヨフと同様)「全一態 *всеединство*」と言い換えられる。そして、彼らにとって全一態は〈一なる神〉の別名であった。したがって、トルベツコイが意識をソボルノスチと捉えたことは、「人間意識の本性」が神的なものであると宣言したに等しい。

しかし、意識の本質はソボルノチであると唱えただけでは、それが全一態=〈一なる神〉に到達しうることを示したことはない。そこでトルベツコイはソボールの意識の実際を明らかにしようとする。個的な意識の特徴は、それが知覚的(視覚的)風景を世界の原型とみなす点に存する。だが、ほかならぬこの特質のゆえに、個的な意識は〈真に存在するもの〉(究極的には〈一なる神〉)を把握できない。これに対し、ソボールの意識とは言語的な意識である、とトルベツコイは考える。彼によれば、(知覚とは違い)言葉においては、〈真に存在するもの〉が顕現しうる。

トルベツコイの言語論はごく簡略に述べられたのみで終わっている。このことは、彼の認識論的精練の作業が中途半端であることを意味する。しかしながら、それが絶対的なものを独断的ではない仕方では提示しようとする試みであったことを評価すべきであろう。

後に G.G.シュペートはトルベツコイの認識論に注目した。また、あのニコライ・トルベツコイは彼の息子であった。これらの事実は20世紀ロシアの言語思想を理解する際に念頭に置かれなければならないだろう。

(きべ たかし、筑波大学)

【B20】フョードロフの終末論の構造と意義

小俣 智史

フョードロフの思想は「復活」、「不死」の実現を志向する「共同事業」、全人類の営為を中心的主題として展開される。その際立った特徴は、彼の説く思想に漂うマテリアリスティックな雰囲気であり、この点でフョードロフは周縁の思想家・宗教哲学者と明らかに区別される。

本発表では、フョードロフがそのような特異な思想的立場に立つに至った契機を彼の終末論に求め、その終末論の構造の考察を介して、フョードロフの思想の導き出すものを探ってゆきたいと思う。

フョードロフは伝統的な終末論、すなわち黙示録的終末論を拒否する。フョードロフにとって最後の審判に終わる終末は道徳的に首肯されぬ終末であり、悲劇的結末、天国なき地獄である。しかし、こうした非終末論化の傾向を有するにもかかわらず、フョードロフは黙示録的終末の潜在的可能性を完全に捨て去ることなく、依然としてそれを保持し続ける。フョードロフにとって、黙示録的終末であれ復活の終末であれ、決定論的・宿命論的終末論は矛盾をもたらすものと思われた。そのため、フョードロフの終末論は常に二者択一の可能性を帯びたもの、条件的なものとなり、その選択は人間の手に委ねられ、「神の国」の実現は人間の「共同事業」に依存するのである。この点に、フョードロフの終末論の特異な構造が見出される。

フョードロフの唱える終末論の条件的性格は、結果として、終末の選択者としての人間の活動を要請する。フョードロフは終末を条件的なものと思定することによって、人類の世界内在的・歴史内在的活動の妥当性・必要性を導き出す。言い換えれば、歴史の終末における神の介入に対置する形で人間による「復活」、「神の国」の実現を歴史の終末以前に設定することにより、フョードロフの「共同事業」は必然的に世界内在的・歴史内在的手段を取り入れなければならないのである。このように、フョードロフの終末論的立場はその思想全体を方向づける契機となっている。

フョードロフの思想にその終末論が与えた影響を考慮するならば、フョードロフの思想を考察するに際してその終末論を看過することは出来ないと言える。本発表では、そのような立場からフョードロフの思想の再検討を試みる。

(おまた ともふみ、早稲田大学院生)

【B21】 P. D. ユルケーヴィチにおけるプラトニズム
と西欧近代哲学の相克

宇都 弥生

主として 19 世紀後半以降, 近代化の波を受けた世界の様々な地域で, 西欧近代哲学が共有されるようになっていったことは周知の通りである。西欧近代哲学との徹底した批判的対決を通して, これを包み越える自らの哲学的立場を形成しようとする努力こそ, 総じて非西欧諸国の哲学的営みであったと言っても過言ではない。そして, そのように哲学知の世界化が進行した現在, 哲学史一自国のものであれ, 西欧のものであれ一を再構築しようという試みが, わが国を含め世界各地でさまざまに行われている。

ロシアで新たな「ロシア哲学史」再構築の試みが現われ始めたのは, ペレストロイカ前夜のことである。ロシア(帝国)において学究的な哲学を担ってきた神学大学(もう一つが大学)に着目し, そこにおける西欧哲学受容とその批判, 乗り越えの実態を洗い出そうとする「神学大学の哲学」研究もこのとき新たに浮上してきたのである。これには, 単に歴史の闇に埋もれていた哲学の発掘ということとどまらない肯定的な意味がある。というのも, これまでしばしばロシア哲学の特徴として「認識論の欠如」ということが指摘されてきたが, この問題を考え直す契機を, この新領域は与えてくれるからである。

さて, 神学大学の哲学は, 一般に「キリスト教的プラトニズム」と特徴づけられている。「キリスト教的プラトニズム」が, 宗教と哲学の一体化したものであるということは良いとしても, 問題はそこで言われる「プラトニズム」とは何か, ということである。思うに, ロシアの伝統的な宗教思想において, それは自明なものとして皆に理解されていたわけではない。むしろそれはそれぞれの思想家たちによって新たに発見されねばならなかったものと思われる。そのプラトニズムをロシア独自の認識論として確立しようと模索していたのが神学大学の哲学ではなかったか。

本研究では, 神学大学の代表的哲学者 P. D. ユルケーヴィチ(1826-74)の代表作「プラトンの教説における理性とカントの教説における経験」(1866)を読解する(彼は V. S. ソロヴィヨフの師であり, また 20 世紀初頭ロシアの宗教ルネッサンスを準備した非常に重要な人物である)。そうすることによって, プラトニズムの認識論化をもって西欧近代哲学の超克の努力としたユルケーヴィチの哲学的思索の, そのロシア哲学文化における役割と意義とを解き明かす一助としたい。

(うと やよい)

【C22】《Ты》 или 《Вы》?

村越 律子

二人称代名詞複数形 **вы** が一人の相手に対して用いられる場合, 単数形 **ты**(T)が親しい形式であり, 複数形 **вы**(V)がていねいな形式であると言われる。T/V は対人関係修辭機能を持つので, その用法は会話のエチケットとして説明されることが多い。しかしながら, 二人称という文法的中核項目にもかかわらず, エチケットの領域を超えての議論はほとんどないように思われる。T/V の使い分けにどのような要因が関わっているのだろうか。近年研究が進んだ社会言語学の知見をもとに述べる。

歴史的な研究によると, V は権力, T は連帯を表すとされる。一人の相手に対して用いる V は, 本来, 上流階級のことばであり, 一般の人々は T 形のみを用いていた。上流階級の人々は下層の人々を T で呼びかけ, 自分は V で呼ばれた。このようにして「権力関係」を表す非対称的 TV の用法が生まれたという。また, 相互的な TT の用法は, 親密さから二人が共通の利益で結ばれていることに同意する「連帯感」に拡大していった。他方, 権力と連帯は個人間の距離と相関的に結びついてポライトネスのルールを形作っていったと考えられる。一般に, 上流階級の社会関係はそれほど緊密でなく, 人々はより独立している。これに対し, 下層の人々は必然的にお互いに依存しているので, 平等や連帯の関係が生じやすく, それが相互の T のやり取りによつて的確に表現される。その結果, T は相手との距離を縮める手段として, また, V は相手との距離を保つ手段として用いられるようになったのだろう。このように, T/V の対立は, 権力や連帯という意味論的定義と相手の領域に踏み込むか否かのポライトネス・ストラテジーの相関関係によって説明することができる。

さらに, これらの特徴は T/V の選択に関わる社会的関係に反映される。T/V の選択に関わる社会的関係とは①年齢, ②親しさ, ③社会的地位の三つで, これに発話場面(公的か私的か)を加えた四つの要因が T/V 選択の決め手となる。年齢と社会的地位には権力関係が反映され, 親しさには連帯が, そして, 発話場面には相手との距離感が関与するものとみなすことができる。

この他, V から T への切り替えの問題, どちらが先に言い出すべきかなど, 現代ロシア語社会のマナーについても言及したい。

(むらこし りつこ, 上智大学)

【C23】古代教会スラブ語における分詞の短語尾・
長語尾について

恩田 義徳

スラブ世界最初の文語として知られる古代教会スラブ語(old church slavonic, старославянский язык)は一部の音韻的特徴を除けばスラブ祖語に匹敵する程古い特徴を保持しており、教会の言語としてスラブ諸語における文章語成立に多大なる影響を及ぼした言語である。ロシア文語もまたその成立過程において古代教会スラブ語の大きな影響を受けており、その通時的研究の一端はここに置くことが妥当であろうと考えられる。

古代教会スラブ語の分詞の体系は、その歴史的過程の中で現代ロシア語の形動詞、副動詞として形を変えて整理された。この分詞体系の変化の過程は東スラブ語の特徴を知る上で、あるいは現代ロシア文語の成立過程を解き明かす上でも重要な要素となり得るだろう。

この整理の過程においては分詞が短語尾であるか、長語尾であるかは大きな問題となる。発表者はこの点に興味を持ち研究を続け、2006年の関東支部会において古代教会スラブ語の分詞の短語尾、長語尾の選択基準についての報告を行った。その中で形容詞の場合、短語尾、長語尾の選択が統語的、意味的基準から行われるのに対し、分詞は形容詞の場合とは異なる統語的基準から選択されることを示した。その際会場で指摘されたいくつかの点を踏まえ、本発表では別の観点からの分析を行う。具体的には山口巖『ことばの構造とことばの論理』(1998, pp. 60-72)において論じられている **redundancy** という観点を参考にし、これを分詞に当てはめて検討する。これは「従来形容詞の長語尾及び短語尾の使用は、形容詞の修飾する名詞の指示する対象が特定のものとして、一義的に確定さるべきものであるか否かに依存する」(山口 1998)という論理では説明できない欠陥を、**redundancy** という観点を採用することで説明できると論じたものである。

redundancy は形容詞の種類と関連があり、したがってそのまま分詞に当てはめることはできない。この点を考慮し理論をどのように適応させるかが目下の課題である。

(おんだ よしのり, 東京外国語大学院生)

【C-α】パネルディスカッション：ロシア・フォル
マリズム 文学理論を超えて—メディア, 経験科
学, 一般意味論— 企画・司会：野中 進

ロシア・フォルマリズムの歴史的・現代的な価値を再検討するうえで重要な作業として、同時代の芸術や学問の諸領域との対比が挙げられる。1920年代前後のヨーロッパにおいて活発な活動を行い、その後しばしば忘却の淵に沈んださまざまな知的潮流との対比を通じて、逆に「なぜフォルマリズムがかくも長期間にわたって影響力と生命力を保持してきたか」という問いも浮かび上がってくる。そのさい、「文学理論」の枠内に閉じるのではなく、むしろ今日隆盛である「文化研究」の枠組に積極的に接続を試みることで、求める答えは得られるだろう。したがって、本パネルでは、一方でフォルマリズムの同時代的コンテクストの検証作業を行いつつ、他方では彼らが今日の人文科学に対してなお果たしうる知的貢献を検討する。より具体的には、次の三つの系に沿っての議論を予定している。

(1) **メディア技術とフォルマリズム**: 1920年代、詩を論じる際に学問的トピックとなっていた、詩の本性をめぐる二つの見方、「耳による詩/眼による詩」の対立の概観。一方には、いわゆるフォルマリスティックな詩の分析に特徴的な「音=素材」という観念があり、他方には、特にイントネーションにかかわる「朗読=詩人の声」という観念があった。そしてここに、グラモフォンの登場によって変質を蒙った、「声」に関する感性が反映されていることを検証する。(八木君人, 早稲田大学)

(2) **経験科学とフォルマリズム**: 自然科学と人文科学の境界を乗り越える、学際的な試みとしてのフォルマリズムについて。彼らの議論に特徴的な「経験科学的」な手続き(たとえば研究対象の隣接領域からの抽象, 研究方法の定量性・検証可能性への着目など)。とりわけ「ドミナント」の概念はこの点で示唆的である。こうした論点を踏まえるとき、フォルマリズムの議論に〈美学への認知科学的なアプローチ〉の萌芽を見ることがもけっして行きすぎではない。(V. グレチコ, 東京大学)

(3) **一般意味論とフォルマリズム**: 意味についての学問(意味論)の誕生から見たフォルマリズム。とくに、社会運動的な意味合いをもった一般意味論(**General Semantics**)の潮流。多義性と一義性の相克の問題。具体的には、I.A. リチャーズの活動と対比することでトウイニャノフ『詩の言語の問題』と「レーニンの語彙」論の新しい読みを試みたい。(野中進, 埼玉大学)

コメント：貝澤哉(早稲田大学)

【C-β】ワークショップ：ロシア語教育を考える

ーロシア語学研究の立場からー

司会・総括：中澤 英彦(東京外国語大学)

本ワークショップでは、ロシア語教育について、ロシア語学・言語学研究の立場から、社会言語学・言語教育法・参照文法・言語教育実践などの諸側面を検討し、より進んだロシア語教育への道をさぐる。

(1) 旧ソ連・東欧圏におけるロシア語・ロシア語教育の位置

白山利信(筑波大学)

東西冷戦期のロシア語は、陣営を率いる盟主国ソ連邦の第一言語であったことから、基本的に、旧ソ連圏においては事実上の公用語、東欧圏では英語よりも社会的な重みを持つ第一外国語として位置づけられていた。1990 年前後の東欧諸国における相次ぐ社会主義政権の崩壊、1991 年のソ連邦の解体により、(ロシア連邦を除く)当該地域でのロシア語の社会的意義が根本的に消失し、ロシア語の社会的機能域が急速かつ大幅に縮小した。それと同時に、学校・大学教育における必須科目としてのロシア語教育の必要性も薄れ、ロシア語科目の選択科目化が進んだ。

報告では、旧ソ連・東欧圏の事例として、中央アジア諸国 4 カ国とポーランドで実施した、若者(被験者の大半は大学生)に対する社会言語学的なアンケート調査結果に基づき、ポスト・ソヴィエト時代の旧ソ連・東欧圏におけるロシア語・ロシア語教育の現状の一端を探り、ロシア語の機能域低下の実態(ポーランド：第 2 外国語としてのロシア語の定着、中央アジア：言語ナショナリズムの台頭等)を検討する。

(2) 複言語主義とロシア語教育

小林潔(神奈川大学)

現在、外国語教育に於いて、欧州評議会が提案した「ヨーロッパ言語共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages: CEFR」が注目されている。複言語社会を標榜する欧州連合の言語教育で、シラバス・教材の作成や到達度評価に用いられているものである。日本ではドイツ語教育やフランス語教育で CEFR 参照が見られ、また、大阪外国語大学のように全学での評価基準として参照している機関もある。ロシア語についても ТРКИ(ロシア連邦教育省認定ロシア語検定試験)に反映されており、この試験を取り入れる形で既に教育に活かされている。

本報告では、ロシア語教育への CEFR 応用の現状と可能性を、特に非専攻語としてのロシア語教育を念頭

に考察する。同時に、CEFR を生み出した理念である複言語・複文化主義についても検討する。旧ソ連・東欧圏を複言語・複文化社会と考えることも可能であり、白山発表をも踏まえて報告したい。

(3) ロシア語における記述文法と参照文法

堤正典(神奈川大学)

匹田剛(東京外国語大学)

ロシア語の記述は常に発展し続けており、新たな知見が得られている。参照文法は、学習者が外国語の学習や実践のために用いるものである。記述的研究において知られている文法に関する知識を参照文法に盛り込むと、それを改訂・補強することができる。

参照文法は実用書であり、高度の言語学的知識を必要とするような事項は記載しにくい。記述的研究で得られたことのうち、ロシア語学習に特に有用なものを選択して盛り込むことが必要となる。

ここでは、ロシア語の記述的研究において得られている知見のいくつかを学習者のための参照文法に盛り込むことについて検討したい。具体的にいくつかの事例を挙げて報告する。

(4) ロシア語文法教育とコンピュータ

山田久就(小樽商科大学)

コンピュータを用いた二つの教材、①授業で文法に関して説明する時にプロジェクターに投射する教材、②授業の復習等で学習者が文法に関して参照する教材の作成について報告する。

二つの教材は紙媒体の教科書に対する副次的な教材であり、プリントなどと併用するものであるが、コンピュータを用いた教材の利点は、多くの情報を提供できること、動的に情報を提供できることなどにある。二つの教材はともにウェブブラウザ上で使用する(ただし、サーバは必要としない)。コンテンツの地の部分と単語の語形変化等に関するデータは分離してあり、地の部分は HTML 形式、データは XML 形式であり、地の部分とデータは JavaScript プログラムで結びつけられている。独自に教材を作成する際の効率性とカスタマイズ性に重点をおいている。

コメント：金田一真澄(慶應義塾大学)

林田理恵(大阪外国語大学*)

*2007 年 10 月より大阪大学

以上の研究報告要旨は、著者に無断で引用はできません。

Not for quotation without the author's agreement.

Published by the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

c/o Asssoc. Prof. G. Hikita

Department of Russian and East European Studies

Faculty of Foreign Studies

Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan

© 2007 JASRLL

ロシア語ロシア文学研究 第39号 別冊

日本ロシア文学会第57回研究発表会

報告要旨(予稿)集

(2007年10月27～28日, 千葉大学)

2007年9月26日発行

発行者 日本ロシア文学会 井桁貞義

〒183-8534

府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学外国語学部 匹田研究室内

日本ロシア文学会事務局

ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/robun/>

研究発表会報告要旨は、これまで、①プログラム(会報)、②プレプリント(電子版)、③翌年の会誌「ロシア語ロシア文学研究」に掲載される報告要旨と、3つの異なるかたちで公表されてきましたが、2007年度からは、研究発表会の前に発行される本「報告要旨(予稿)集」(会誌別冊)に一本化されます。